

# 坂口安吾の戦国武士の死生観

佐藤 雅男

専修大学文学部兼任講師

## I 安吾の戦国時代

坂口安吾（一九〇六年～一九五五年）は、日本の歴史に関する数多くの散文や小説を書いた。古代から中世・近世そして近代に亘って、幅広く構想された小説には未完の長編もある。その作品形態は人称や分量も多様であるが、近代的な一種の歴史物語と呼べる特質がある。安吾の思想は、そうした其々の作品に描かれた歴史的個性の物語に内在している。

安吾は戦争中に、「イノチガケ」（15・7）「島原の乱雑記」（16・9）という切支丹史に関するものから、織田信長に触れた「鉄砲」（19・2）を書く。<sup>1</sup>彼の関心は切支丹史から、次第に中世から近世に亘る過度期戦国時代の武士の思想に広がった。戦後は、「我鬼（豊臣秀吉）」（21・9）「二流の人（黒田如水）」（22・1）「家康」（22・1）という戦国武士の生きざまを描く。そして、「織田信長」（23・8）を経て、「梟雄（斎藤道三）」（28・6）という

短編や、「信長」(28・5)「真書太閤記」(30・4)などの未完の長編、また晩年には「狂人遺書(秀吉)」(30・1)が書かれる。そうした歴史的個性に関する眺望は、「安吾新日本地理」(26・3〜12)『安吾史譚』(27・1〜7)の連作の中でも具体的に展開された<sup>2)</sup>。

本稿では、安吾の思想を理解するために、先ずは過度期戦国時代の「梟雄」(斎藤道三)・「織田信長」・「狂人遺書」(豊臣秀吉)・「家康」という代表的な戦国武士に関する文章を取り上げる。そして、和辻哲郎などの思想史と対照しながら、安吾の戦国武士の死生観をめぐる思想表現の特質を検討してみよう。

## Ⅱ 斎藤道三の「死につぶり」

「梟雄」は、昭和二八年六月に『文藝春秋』に発表された。梟雄とは、戦国下剋上の悪党のことである。この作品は美濃の斎藤道三の生い立ちから、後半では娘婿の織田信長との関係にも触れ、道三の死に際のように語られる。

和辻哲郎は『日本倫理思想史』(三)の「第一章 武士的社会的の再建」で、戦国下剋上に関し、その実質は、名家の伝統や主家の権威が力を失い、実力が物を言い出したことで、そうした支配し得る実力とは、決して武芸の力のみではなく、「人々を心服せしめ、統率し、集団を意のままに動かし得るような人格の力、意志の力は、一層必要であった」と説く<sup>3)</sup>。実力や器量を兼ね備え、頼みにもなるが、その行為的特質が、いわゆる「人格の力、意志の力」を悠に逸脱し、人々から悪党と呼ばれた戦国武士に、斎藤道三、織田信長、そして松永久秀などがいた。背後

的には古代史からの連続性の問題があるが、安吾の日本史で情熱を込めて語られたのは、そうした戦国時代の梟雄の存在の意味である。<sup>(4)</sup>

周知のように現在の日本史研究では、斎藤道三は油売りから一代の下剋上ではなく、長井新左衛門尉と長井新九郎の親子二代による国盗りというのが定説である。それは『六角承禎条書写』（一五六〇年七月二一日）に、道三の息子義龍の「祖父新左衛門尉者、京都妙覚寺法花坊主落」とあり、道三の父の新左衛門尉が妙覚寺の坊主であった記載による。この発見の信憑性は、それが書かれた時期が、同年六月十二日の桶狭間の戦いの直後であり、道三が没して四年しか経っていない事実にある。

安吾は、慶長十六年（一六一一年頃）の『信長公記』、また寛永末期（一六二四年～一六四五年頃）に書かれた『美濃国諸旧記』を踏まえ、建前としては一代説を取っている。だが、安吾の文章には、微妙に二代説を暗示する性質もある。それは松浪庄五郎が長井家の覇権を握って、長井新九郎と改名し、さらに斎藤家を奪い取って、斎藤山城守利政となり、後に剃髪して斎藤山城入道道三と称した時に、「新しい血がまた彼の血管を流れている。道三はそれを本当に見つめているのだ。古い血はもはやなかった。道三はそれを確認しなければならぬ」と言い、「道三は新しい血をためすために、最大の権力をふるった。その血は、彼の領内が掃き清められたお寺の院内のように清潔であることを欲している」と執拗なまでに、「新しい血」という言葉を使用しながら世代交代を示唆する。そうした血の繋がりは、生命の連続性であり、一代にしる二代にしる同質の家の宿命を孕んでいる。次に安吾の文章に即して、道三の生涯を辿ってみよう。

道三は京の北面武士の子に生れ、仏門で法蓮坊として才覚をあらわす。だが、美濃の長井家の子息の南陽坊が妙覚寺で引き立てられるのが気に入らず、京で妻をめとり、油売りになる。そして持ち前の器用さを發揮して、独自

な商法で金銀を蓄えて武士に成り上がった。そうした道三の様子は次の様に語られる。

行商で諸国を歩きつつ、彼は諸国の風俗や国情や政情などに耳目をすませた。また名だたる武將の兵法や兵器や軍備についても調査と研究を怠らなかつた。一文銭の孔に油を通す手錬などは余技だった。彼は自分の独特の兵法をあみだした。それはまったく革命的な独創であった。それは後日織田信長がわがものとして完成し、それによって天下を平定した兵法であった。元祖は一文銭の油売りだ。その兵法の原理は単純である。最も有利な武器の発見とそれを能率的に使用する兵法の発見とである。〔梟雄〕28・6全9・403)

道三の発見には革新的なものがあつた。それは三間半(約6m)の長槍である。敵と丁々発止と打ち合うには不向きでも、正面衝突が行われる時は、長槍は明らかに有利である。長槍を最初に使い、後は刀で接近戦に移る方が合理的な戦い方である。この原理は槍に限らず、鉄砲が伝来すると、武士達はこの革命的な新兵器に注目した。だが、鉄砲は最初の一発しか使いものにならない。二発目の発射までの時間を短縮することは、当時の技術では不可能であつた。しかし、道三は鉄砲を打ちまくる方法を発見した。それは鉄砲組を三段に並べ、一列から三列目が射つまでに、最初の一列目の弾込めが連続的に完了する戦術である。後日に信長が借用するが、元祖は斎藤道三であつた。明智光秀も、若い頃、兵法や鉄砲戦術を道三に習つた。

道三は、やがて美濃の国で実権を掌握し、斎藤道三と名のり、領主の土岐頼芸を追放して、その愛妾を自分の妻にする。だが、土岐血統の長男義龍は、父道三と対立する。そして、愛する末娘の濃姫を信長に嫁がせ、道三と信長は富田の正徳寺で面会することになった。安吾は『信長公記』(首巻「山城道三と信長御参会の事」)を踏まえて、

道三が会見の前に、富田の町はずれの民家に隠れて戸の隙間から信長の通過を待っていた場面を語る<sup>5)</sup>。信長は鉄砲弓の五百人と三間半の長槍五百人の家来を殆ど全部つれて、木曾川を渡って来た。信長の恰好は猿回しにそっくりであった。だが、それは魂を込めた兵法に必然的な姿であった。袋の中には多くの弾と火薬が入っていた。鉄砲を知らない人々は信長のことを、大たわけと称したが、その恰好は信長の道三に対する暗黙の暗示であり、道三には、その意図は即座に理解された<sup>6)</sup>。

信長は虎と豹の皮を縫い合せた半袴を羽織っていた。その悪趣味に道三は笑いが止まらない。だが、一方の信長は正徳寺に着くと、室に閉じこもり、髪を結び、長袴に美しい飾り太刀を身に着けた。家来達も初めて見る信長の姿であった。『信長公記』の有名な場面であるが、そこを安吾は次の様に語る。

水もしたたるキンダチ姿であった。信長は本堂へのぼる。ズラリと物々しいガンクビが居並んでいる。知らんフリして通りすぎ、縁の柱にもたれていた。やがて道三がビョウブの蔭から現れて信長の前へ来た。信長はまだ知らんフリしていた。道三の家老堀田道空が「彼はこの会見の申し入れの使者に立って信長とはすで見知りごしであるから、――山城どのです」と信長に云った。すると信長は、「デアルカ」と云って柱からはなれ、シキイの内へはいつて、それからテイネイに挨拶した。

ただちに別室で舅と舅の差向い。堀田道空の給仕で、盃ごとをすませ、湯漬けをたべる。二人は一言も喋らなかつた。道三は急に不キゲンになった。毒を食ったような顔になって、「また、会おう」スツと立って部屋をでてしまった。（『梟雄』28・6全9・418）

道三は信長と別れて、自分の家来に「されば無念なる事に候。山城が子供、たわけが門外に馬を繫べき事、案内にて候と計り申し候」(『信長公記』首巻「山城道三と信長御参会的事」と言った。この日を境に、道三と信長はその魂から結託したというのが安吾の解釈である。信長が帰城すると、亡父の腹心が謀反して陣地を構築していた。続いて多くの裏切りが起こった。彼らは道三が信長に見切りをつけて、領地は道三の手中に帰すると考えた。ところが兵力の少ない信長が内部の謀反に対して全軍を引き連れて討伐に出ると、美濃の道三が部下に命じて信長の留守の城を守る。信長は城を明け渡して謀反の征伐に出掛ける。道三の命令で、美濃の援兵は決して信長を裏切らない。

道三と信長の魂からの結託は強かった。尾張の人々は仕方なしに梟雄の真心を信じた。真心とは、「よくもあしくも、生まれつきたるままの心」(『玉勝間』本居宣長)のことである。道三にやられるのは信長ではなくて、信長の敵の自分達かも知れないと感じるようになった。安吾は、そうした道三と信長との真心からの結託の背後には、信長と正反対ともいえるべき義龍の存在があったと言う。息子の義龍を憎む反面に、信長を認め、そして成上り者として死ぬところがいかにも戦国梟雄の性格である。安吾は道三の無意識の心理に関して次の様に述べる。

義龍が土岐の血統と名乗るようになったのは、まだ二十頃からでもう十年ちかくなるのである。彼が土岐の血統なら、道三は彼の父ではなくて、仇である。当り前の結論だ。道三は自分の立身出世のために人を殺す機会には、機会を逃さず、また間髪をいれず、人を殺してきたものだった。彼は人の顔を見るたびに考える。いまこの人間を殺すこともできるな、と。人間どもが平気な顔で彼と対座しているのが奇妙な気持になることもある。オレの心を見せたいなと思った。

むろん義龍を殺す機会があった。非常に多くあった。これからも有りうる。信長を殺す機会がいつでもあると同じように。いつでも殺せるが、オックウだった。なんとなく、そんな気持ですごすうちに、今のようになってしまった。今ではその腹心が堅く義龍をとりまいていて、殺すのも大仕事になってしまったようである。

〔梟雄〕 28・6全9・421

義龍は腹心を養成し、臣下を愛し、真面目で、それは全てが道三と異なっていた。義龍が土岐の血統であるなら、道三は彼の父ではなく仇である。だが、殺す実力の問題ではなく、それを決行し得るか否かという心理的に奇妙な問題である。人々が大たわけと噂する信長に道三が濃姫を与えたのも不思議であるが、風変わりな信長を道三が気に入ったのは事実である。その理由としては、むやみに殿様らしい様子をする義龍という存在がある。だが道三は、義龍を心理的に殺すことが出来ない。そこには何か宿命的なものがある。義龍に殺されるのが心配で、対立的な信長を味方にしたわけではない。だが、その予感から信長に濃姫を与えたようなことになっている。そして稲葉山城に道三と義龍が長い間一緒に居たことは実に奇妙な事実である。安吾は断言を控えているが、そこには道三（長井新九郎）とその父親（長井新左衛門尉）との間に葬られた過去の秘密があつて、道三はそうした記憶の呪縛に苛まれて居たのかもしれない。道三も自分の父親と対立した可能性は否定できない。

安吾はそうした道三の心理の奥に踏み込んで、「しかし、すべてが、オックウだ。六尺五寸のライ病殿に関する限り、すべてがオックウの一語につきる。そして、ふと気がつくとき、『あの化け者めにオレの寝首をとられるか』そう考えているのであつた。久方の光がしず心なく降るが如くに、そう考えているのであつた」と言う。道三は義龍を殺すことを「オックウ」に感じているうち、ついに義龍と戦うことになった。

安吾は親子の戦いの遅延原因を「オックウ」という片仮名で説いているが、「億劫」の「劫」とは、元來は期間の意味である。それは古代インドの巨大な時間単位であり、一劫の長さは仏典では様々な比喩で説かれる。盤石劫の比喩では、一辺が約七キロメートルの立方体をした硬い岩を、柔らかい綿布で百年に一度ずつ払い続け、岩がようやく磨滅しても一劫はまだ終わらない。仏語の「億劫」とは、面倒くさいという単なる日常心理ではなく、気が遠くなるような時間性が絡む概念である。しかし、義龍との戦いで死を覚悟した道三は、信長の援軍をあてにせず、陣の近くへ寄せつけなかった。道三は鶴山を降り、長良川の河原に出て、身のまわりに親兵だけ引き連れ、一番前へ陣取った。その場面を安吾は『信長公記』（「山城道三討死の事」）を踏まえて次の様に描く。

「鉄砲の道三が、鉄砲ごと城をとられては、戦争らしく戦争をする気持にならないわさ」道三は笑って云った。「お手本にある戦争を見せてやるができないのは残念だが、悪党の死にツプuriを見せてやるう」そして家来と別れる時にこう云った。「今日は戦争をしないのだから、オレは負けやしないぜ。ただ死ぬだけだ」道三はヨロイ、カブトの上に矢留めのホロをかぶって、河原の一番前に床几をださせてドッカと腰かけた。

敵の先陣は竹腰道塵兵六百。河を渡って斬りかかったが、敵方に斬り負け、道三は道塵を斬りすてて、血刀ふりさげて床几に腰かけ、ホロをゆすって笑った。つづいて敵の本隊が河を渡ってウンカのように突撃し、黒雲のような敵の中で道三はズタズタに斬られていた。（『梟雄』28・6全9・427）

「主をきり罨をこらすは身のおはり昔は長田いまは山城」と詠われた道三である。そして「床木に腰を懸け、ほろをゆすり満足」を一瞬は味わった梟雄にも、戦場に生き残ることの「あきらめ」の悲壮感が漂う。相良亨は『日



本人の心』で、「あきらめ」と「覚悟」に関して、『あきらめ』は、これまで述べてきたように、その一般的傾向をいえば、何ものかへの憧憬をもちつつも、その不如意を嘆く時、その嘆きのうちに次第に定着してくる心のある安定であるが、『覚悟』は、不如意の嘆きのただよいが、そこに次第にある安定を沈澱させることを待つのではなく、不如意の嘆きのうちにおいて、すずんで自己制御的に断念を決意するものといえよう。このように、『覚悟』は『あきらめ』とつながる。しかし『覚悟』は、『あきらめ』に対して、自己制御的であり、積極的であり行動的である」と説く。この時、道三は信長の援軍をあてにせず、戦力的にも孤絶していた。河原の前に床几をだして腰かけた道三には、生への「あきらめ」と「死の覚悟」があった。そして、長良川の戦場という天地の間に、ある位置を得ている。敵の先鋒の竹腰道塵を倒し、道三は母衣をゆすって笑ったが、結局は敵の本隊に切り裂かれ命を落した。その「死につぶり」には、道三の「億劫」なまでに「不如意な嘆き」を断ち切った死生観がある。それはまさに梟雄らしく、壮絶な死に際であった。

### Ⅲ 織田信長の「死のふは一定」

安吾の信長への関心は深く、最初に書いたのは、昭和十九年二月に『文芸』に発表した「鉄砲」である。この作品で、鉄砲の威力的な使用法を最初に理解したのは信長であり、「その精神に於てまさしく近代の鼻祖であったが、直弟子秀吉を経、家康の代に至って近代は終りを告げてしまった」と言う。戦争中の時期に、「今我々に必要なのは信長の精神である。飛行機をつくれ。そのみが勝つ道だ」と当時の日本の精神主義を批判した。

奥野健男は安吾の真の性格とは、「虚無的合理主義」であり、透明な結晶体として、その合理性と精神性が統一した人生観や世界観を形作っていると言う。それは「人間しか現世しか信じないにもかかわらず、この世では実現不可能な完璧な美、超越的な神秘を希求する精神主義、理想主義であると同時に、救済や進歩など信じない虚無と孤独を核に含んだ上の現世的な合理精神であり、健全な常識性」<sup>(8)</sup>であると述べる。この奥野の指摘は安吾という思想家の核心に関わると考えられる。こうした安吾にとって、織田信長という歴史的存在は、彼自身の思想表現の一つの重要な拠り所であった。

和辻哲郎は『鎖国―日本の悲劇―』(下)で、キリスト教の伝来とフロイスの論から信長に関して具体的に詳述する。<sup>(9)</sup>そのことは『日本倫理思想史』(三)では、比叡山の焼き討ちや、伊勢長島の一向一揆の戦滅、大坂の本願寺への破壊的行動を語った後で、「そのほかにも、彼の果敢な態度を示しているのは、戦術上の思い切った革新である。中でも有名なのは、鉄砲隊戦術の創設であろう」と言う。鉄砲が種子島に伝来したのは一五四三年の信長が十才の時であり、世人が驚いたのは、一五七五年の長篠の合戦である。この時に信長は鉄砲の活用で、武田勝頼の精銳な騎馬軍団を壊滅させた。鉄砲そのものは珍しくなかったが、それを戦術的に活用したのは信長であり、その着眼は時流を抜き出していたと説く。

また、信長は鉄張りの軍艦に大砲をのせ、大坂湾の制海権を握り、本願寺を軍事的に屈服させた。和辻は、こうした諸点は武將としての信長の特徴であるが、さらに英雄として人気を集めたのは上洛後、もし部下の兵士が乱暴したならば必ず知らせよという言明であると言う。そして禁裏御料所の復旧や、交通路の整備、楽市楽座など近世都市の発展も信長の炯眼によって始まった。

さらに、一時切支丹大名が栄え、全国にわたる切支丹の広汎な伝播などもあった。そうしたことから和辻は、「信

長の最盛期にあつては、日本がヨーロッパの近代と結びつき得る可能性は、相当に強かつたといえるであろう。後の恐ろしい反動によってこの時代の実際の色彩は塗り変えられているが、しかし実際の民衆の動きは、革新的な方向へも向かい得るものであつたと思われる。この運命の岐路は、信長の不慮の横死であつた」と指摘する。こうした歴史意識は安吾と同様のものであるが、その語り方には個性的差異がある。

昭和二三年八月の『季刊作品』に、安吾の「織田信長」が発表される。これは鷹狩りから帰つて来た時、朝廷から綸旨を受け取つた三四才の信長の逸話から書き始められる。そして松永久秀と結託し、將軍足利義昭をたてて上洛する時期の信長の姿が描かれる。信長は朝廷からも認められ、天下布武への自信を持った。

しかし美濃を平定し、宿敵斎藤氏を岐阜から追い払つても、武田信玄や上杉謙信や北条氏康という戦争名人がいる。近くには六角承禎、朝倉義景、浅井長政や、三好一党、松永久秀もいて、西には毛利輝元がいる。確たる自信は持てないが、そこへ朝廷から綸旨がきた。信長も始めて多少の自信を発見したが、さしたる自信では有り得ない。朝廷とは日本の第一の宗家であるが、現実には虚器の一種であり、天下の政務は松永久秀の掌中にあつた。信長は虚器の利用価値を見抜き、天下布武への自信の萌しは掴んでも、まだ本当の自信を持つには至らない。

その後、足利義昭が彼に頼つて来た。それと前後して、松永久秀が、信長こそ天下に号令すべき大将であり、上洛するなら自分が助力すると言つて来た。久秀は信長の実力を見抜いた。彼は次代を知り、天下の執政などに執着せず、次代の実力と器量に依存する術を心得ていた。それに比べて義昭の依存の仕方には節操がなく、そこに人物への信義はない。こうした点に関して安吾は次の様に語る。

利用は、又、信長自身のお家の芸でもあつた。然し、まことの悪党というものには、ともかく信義がある。信

長は悪党にあらず、と言うなかれ。彼は悪党である。一身をはり、投げすてていてではないか。賭場のアンチャンの二七悪党とは違う。ホンモノの悪党は、悲痛なものだ。人間の真相を見ているからだ。人間の真相を見つめるものは、鬼である。悪魔である。この悪魔、この悪党は神に参じる道でもある。（織田信長」23・8全6・199）

安吾は「墮落論」（21・4）の中で、「私はハラキリを好まない。昔、松永弾正という老獪陰鬱な陰謀家は信長に追いつめられて仕方なく城を枕に討死したが、死ぬ直前に毎日の習慣通り延命の灸をすえ、それから鉄砲を顔に押し当て顔を打ち碎いて死んだ。そのときは七十をすぎていたが、人前で平気で女と戯れる悪どい男であった。この男の死の方には同感するが、私はハラキリは好きではない」と言う。これは、「生きよ墮ちよ、その正当な手順の外に、真に人間を救い得る便利な近道が有りうるだろうか」（『同右』）の直後に語られる逸話であり、松永の死に方への同感は、安吾に本質的なものである。松永久秀も織田信長も、その悪党ぶりには変りはない。どちらも孤独な存在であり、そこには奇妙な信義があった。そして、信長は義昭の心を信じなかったが、久秀の信義を信じた。二人の悪党には奇妙な友情があり、久秀の信長依存の魂胆は信長の自信に最大の安定を与え、そうした依存の真実を信ずることで、信長は老嫗の久秀を征服した。信長とは信義を持った梟雄で、人間の真相を見つめる魔王である。そして信長の生の原理は、天下統一の野心の達成を目的とするのではなく、生きること自体が、命がけの遊びであり、そこに全ての魂が賭けられていたと説く。

『信長公記』（首巻「蛇かえの事」）によれば、信長の領地に、「あまが池（安吾―アカマ池）とて、おそろしき蛇池と申し伝へたる池」があった。正月中旬の寒い季節の夕方に、領民が池の辺りを歩いていると、黒い胴体が堤の上にあり、首は堤をこえて池の中へ潜っている。首は鹿の顔のようで目玉は光り、紅の舌も輝いて燃えていた。領

民は驚いて逃げ帰った。この話が当時二九歳の信長の耳に入り、直ちに領民を呼んで話を聞き、その翌日、近隣の百姓を集めて、池の水を桶で掻き出させたが水は減らない。そこで信長は禪一つになり、口に脇差しを咥えて潜り込んだ。それでも蛇には出くわさない。それで陸へ上がり、水泳の達人に潜らしたが、やっぱり蛇は居ないので、清洲の城へ引き上げた。安吾はこうした信長の振る舞いを、日本流の大将のやることではないと言う。

次も『信長公記』（今川義元討死の事）の有名な場面であるが、桶狭間の戦いの時、未明の刻に、今川勢が鷲津と丸根砦に攻撃を始めたとの報告を聞いた信長が舞い始めたのは、「人間五十年 下天（安吾―化転）のうちをくらぶれば、夢幻の如くなり 一度生を得て 滅せぬもののあるべきか」（敦盛）であった。

信長は本陣の今川義元的首だけを狙っていた。鷲津と丸根砦は、敵の勢力を分散させるための罠であり、そこに信長は積極的な援軍はしなかった。後は義元が何処に居るのかの情報入手が問題であった。手薄になった義元の居場所を少数先鋭で奇襲するのが信長の作戦であった。そうした機密情報が内部から漏れるのを恐れて、その晩の作戦会議でも、家来達にそのことは告げなかった。信長は「既に深更に及ぶの間、帰宅侯へと」と家来達を返した。彼等は帰り道で、「運の末には智慧の鏡も曇るとは、此の節なり」と嘲弄した。

その日の未明に出陣の信長に従った家来は、僅か五騎であった。それはまるで鷹狩りの遊びに出掛ける態勢と変わらない。信長の行動の要諦は、鶴や雉などの捉えられるべき獲物が何処に居るのかの情報収集にあった。桶狭間の戦いも情報戦である。敵とは十倍近い人数の不利にもかかわらず、信長が勝利したのは、突然の豪雨という状況も加担したが、相手の勢力が分散し、大将の居場所が何処かの情報を入手し、そこを先鋭部隊で奇襲出来たからである。戦勝褒賞として信長は、敵の大将の首を取った毛利良勝よりも、その居場所を探り当てた築田政綱に多くの褒美を与えた。

清洲の天沢という坊さんが、甲斐を通った時、武田信玄は天沢を自分の館へ呼んで、信長とはどんな男かと聞いた（『信長公記』「天沢長老物かなりの事」）。そこで天沢は朝晩馬に乗り、鉄炮や弓や兵法を習うのが日課で、家来達と鷹狩りをすることを話した。それは、「鷹野の時は、廿人、鳥見の衆と申す事申し付けられ、二里、三里御先へ罷り参り候て、あそこの村、爰の在所に、鷹あり、鶴ありと、一人鳥に付け置き、一人は注進申す事候」という話であった。そうした情報入手の仕方を聞いて、信玄は、「信長の武者をしられ候事、道理にて候」と、その戦が巧いことを納得した様子であった。安吾は、『信長公記』の「蛇かえの事」「今川義元討死の事」「天沢長老物かなりの事」などの逸話の意味を点検しながら、そうした実証精神や行動力は、命がけの科学する魂であり、そのことは好奇心の強い信玄にも理解出来なかつたと説く。

そして「織田信長」の副題にもあるが、信長の好きな小唄「死のふは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりをこすよの」（「天沢長老物かなりの事」）には、彼の死生観の精髓があると見なす<sup>10</sup>。それを安吾は次の様に言う。

一皮めくれば、死のふは一定、それが彼の全部であり、天下の如きは何物でもなかつた。彼はいつ死んでもよかつたし、いつまで生きていてもよかつたのである。そして、いつ死んでもよかつた信長は、その故に生とは何ものであるか、最もよく知っていた。生きるとは、全的なる遊びである。すべての苦心経営を、すべての勘考を、すべての魂を、イノチをかけた遊びである。あらゆる時間が、それだけである。信長は悪魔であった。なぜなら、最後の哲理に完ペキに即した人であつたから。（『織田信長』23・8全6・216）

安吾が言う所の「最後の哲理」とは、「死のふは一定」という生死一如の禅機のはたらきのことを指している。

そして「織田信長」の最後で、松永久秀との友情が如何に育ち、如何に破れるかを問掛ける。初出雑誌の目次には、「織田信長（第一回）」とある。同じく末尾には（未完）とあり、続編が書かれる予定であったが、安吾の突然死により果たされなかった。一つの実証のために生命を賭しても平気な「死のふは一定」とは、すなわち安吾自身が希求した生き方であった。

#### IV 豊臣秀吉の「遺書」

和辻哲郎の『日本倫理思想史』（三）は、秀吉に関して、「彼は永年信長の側にあつてその成功のコツを呑み込んでおり、しかもその気宇と度量とは信長よりも大きかった。炯眼明敏の点においては信長に及ばなかったであろうが、しかし未来への見透しや事業の輪郭は、すでに信長が立てておいてくれたのである。彼はそれを信長よりも一層大きい度量をもって、遂行し切った」と言う。

こうした和辻の「武士的社會の再建」に関する歴史叙述は明快である。そこには秀吉の死に際の際の曖昧な心理感覚に言及することはない。だが、辞世の「露と落ち露と消えにし我が身かな浪花の事は夢のまた夢」には、夢の中で夢を見ているはかない生涯のことだけではなく、それは同時に彼自身の死後、滅びゆく豊臣家への烈しい不安感が現出する。安吾が自らの現存を賭けて試みたのは、そうした秀吉の内奥の危うい心理感覚の表現である。

「狂人遺書」は『中央公論』に昭和三十年一月に発表された。これは秀吉の遺書という形式で、一人称の語りである。この文章には安吾自身の遺書のような緊迫感がある。切支丹史の文献から辿って、信長や秀吉へと突き当た

り、それらの武士が命を賭けて行動した自己認識が、安吾自身の心を捉えたのであろう。そこでの対象認識は、まるで自己認識であるかのような思想表現の特質がある。

壇一雄は『小説 坂口安吾』で、こうした創造過程の問題に関して、「安吾の自己認識と自己拡大の異常な自持は、これらの天才達の史譚をひつとらえてきて、遂に自家葉籠中のものにするのである。このところは重大だから詳説しておくが、安吾は歴史を叙述しようなどと思っていやしない。単刀直入、信長、秀吉、家康の内フトコロに飛び入って、己をたしかめ、己にうなずくだけのことである」と指摘する。安吾は自由や無限の空虚を知って、その中で命を賭けて遊べる表現者である。そうした自己の無限の自由の淋しさや狂気を秀吉の内面的心理にも確かめて行く。「狂人遺書」の大筋を辿りながら、その思想表現を検討してみよう。

秀吉の朝鮮出兵の目的は明との貿易再開であった。その利益によって、他の大名との間に明確な落差を付けたかった。だが、明との対等な貿易には、場合によって武力行使も必要である。それには小西行長の外交能力を使い、朝鮮を用いて明に認識をあらたにさせるしかない。だが、脅かしのつもりが本当に朝鮮征伐や大明征伐になってしまった。皆は秀吉のことを僅か三才の鶴松を亡くし、気が狂ったと言う。本人は大陸出兵を早く終わらせて、無駄に一兵をも損いたくないと念じている。秀吉は、明と対等の貿易をした最初の人間として評価して欲しかった。彼自ら作り上げた虚構に、彼自身が酔ってしまったようなもので、大陸出兵の実現を信じられない。それに比べ、江戸に移転した家康は、水を得た魚のようである。

家康は律儀に振る舞い、秀吉が信長に対してのように、家康は秀吉に対してのが実に不気味である。予想外にも、戦争は偶発的に拡大してしまった。和平交渉に際しても、内と外の使い分けが何ともややこしい。そんな時に、思いがけず秀頼が生まれた。だが甥の秀次は関白の地位を秀頼に返せばいいのに、そうしない。秀吉は、秀頼と秀



次の娘を結婚させようとしたが、秀次は無視した。こうなれば秀次の一族全部を抹殺するしかなかった。それも秀頼のことを思えばこそである。やがて朝鮮から諸大名が帰還し、その悲惨な姿に接して、大陸出兵は失敗だったことがはつきりした。秀吉は病気になり、死の予感に苛まれる。死後の秀頼のことが何よりも不安である。それにひきかえ、初めから大陸出兵に反対だった家康に人々の期待が集まるのは当然である。秀吉は、自らの死後の汚名と、これからの日本を收拾するのは家康という世間の人々の心の動きを、敏感に感じ取っていた。そうした秀吉の心理を安吾は次の様に語る。

江戸大納言は律儀な人だ。誠意の人だ。忠実な人だ。裏切らぬ人である。だがそれも所詮オレが生きているうちだけであろう。オレも律儀で誠実で異心がなくて忠実な家来であったが、信長公が死んだあとではその子の信雄をだんだん素裸にして秋田へ追いやり、その秋田の領地もまたまきあげて今ではオレのお伽衆ではないか。だがオレは信長公のようにまだ戦乱の最中に不慮の死をとげたのとはちがう。ともかく秀頼に跡をゆずり天下をゆずって死ぬのだ。

オレは五大老、五奉行を枕頭によんで秀頼をまもり秀頼の天下を助けて違背あるまじき旨、天地神明に誓って誓紙に書かせ血判を捺してもらった。血しぶきは全紙にとびちりポタポタおちた。「狂人遺書」30・1全10・580

秀吉は家康や利家の手を握り、「頼みまするぞ。頼みまするぞ。」と願う。秀吉は下剋上の時代を、持ち前の実力と器量によって太閤閥白にまで成り上がった。だが、自らの死後のことは覚束ず、そうした不安な心理から有力者に頼むしかなかった。

相良亭は『武士の思想』で、「器量は頼もしさである。頼もしさは、頼み頼まれる人間関係を背後にもつ時生きて働く言葉である。頼むとは、まず己に願望するところがあり、この願望がその人に頼む時に遂げられると期待するものであり、頼もしさとは、かかる期待を実現してくれるであろう能力が予想される時に使われる。戦国時代の人間関係は、まさにこの頼み頼む、関係にあった<sup>12)</sup>」と言う。それは下が上に頼むだけではなく、上が下に頼むことや同輩の間にもある。戦国武士の人間関係の特色は、その上下関係も頼み頼む相互関係にあった。そして秀吉に關して、『只今まで肩を並べたる傍輩』の間であつて、『天下人』としての位置をきずくためには、下手に出る方策をとらねばならず、また彼はそれをなしたのである。一方においては關白太政大臣の權威をかざし、他方では従来の觀念を打破した拳に出て、秀吉は天下人としての地歩をきずきあげようとしたのであつた。だが、その死に臨んでは、あとを『頼む、頼む』と家康らに哀願する以外にすべがなかつた」（『同右』）のである。

前田利光が生きているうちは家康も事が起こせないのであるが、秀吉にはそれも不安である。小西行長も石田三成も、戦争などはしないで貿易は再開できると言つたのに、気がふれて愚かな戦争を起こしてしまつた。安吾は秀吉の心理の核心には、「虚勢、見栄。オレの至らぬためである。むやみに威勢をみせたがるようなオレの虚勢と見栄が知らず知らずオレをかりたててこの破滅を生んだのだ」（『狂人遺書』）という自問があつたと見なす。病床の秀吉は大陸の兵隊の何万という幽霊の夢と、誰も助けにくる人もなく一人で泣き叫んでいる秀頼の夢を見た。秀吉は誇大妄想と同時に合理主義の持ち主であつた。安吾の「虚無的合理主義」は、そうした今はの際にあつた秀吉的不安の心理性と振動する。

晩年の安吾には思いがけず息子の綱雄が生まれ、幼い子供を愛し、迷う自分を知る。その心理が、晩年に秀頼を得て、この子のために豊臣家の権力を維持させようと思ひ、愚かな対外戦争を仕出かした秀吉の心理と交錯する。

そのことは「狂人遺書」の結末部分に、次のように描かれる。

皆々はオレをタワケと思うだろう。それほど兵隊のことが心配ならなぜ今すぐに命令をだしてひきあげるようにさせないのか、と。そこがオレの恥さらしのところだ。虚勢と見栄。むやみに威勢を見せたいバカ。そのためこの無慙なことになったのだが、せめてオレの息あるうちはこのバカを続けさせてくれ。オレの一生の見栄と虚勢を通させてくれ。身動きもめんどろな死病の床ではなおさら虚勢と見栄が通したい。その代りいまわの時にはクワツと目をひらいて必ず云うぞ。朝鮮の兵隊たちをたのむぞと。一兵も殺すことなく日本へ帰るようになつてくれと。そして神々も照覧あれ秀頼の名は決して云わぬぞ。（「狂人遺書」30・1全10・582）

秀吉の死に際の一人称の自己分析という形態をとった「狂人遺書」は、極めて独創的な思想表現である。そしてこの文章には安吾自身の現存の意味が賭けられた衝動力がある。彼はこの作品を書くことで、新たな思想的飛躍を実現した。だが、それを書くことは、全身全霊の精力を使い果たし、彼の命を縮めることでもあった。

## V 徳川家康という「命をはる人」

「家康」は、『新世代』に昭和二二年一月に発表され、「織田信長」（23・8）や「狂人遺書」（30・1）よりも時期は早い。

安吾の最初の歴史物語は、昭和十九年一月の『現代文学』の「黒田如水」で、対象の懷中に飛び込むと言う点では、最も共感し得る対象であつた。それは「二流の人」として昭和二十年に書き継がれ、昭和二十二年一月に出版された。そこには「織田信長」「信長」「家康」「梟雄」「真書太閤記」「狂人遺書」などの萌芽がある。<sup>13)</sup>

安吾は家康とは所謂「狸オヤジ」で、その天下取りには不手際が多いと言う。そして豊臣と徳川と並列状態で、天下取りを目指したのであり、源頼朝の歴史的条件とは異なっていた。安吾に「源頼朝」(『安吾史譚』27・7)の文章がある。遊女屋に匿われた頼朝が、平家の侍に捕えられ、六波羅へ送られて死罪となる時、頼朝を捕えた平家の侍が、命が助かりたいと思わないかと聞いた。その時、十四才の頼朝は、「戦に負けて父も兄弟もみんな死んだから、オレはイノチが助かりたい。坊主になつて死んだ父の後世を弔いたい」と答えた。一見素通りしてしまいがちな言葉の遣り取りであるが、安吾はこの頼朝の返答に、かなり拘っている。そして、「なんとなく約束の違つたような理屈がおもしろい。戦に負けて父も兄弟もみんな死んだからと云いだしたから、オレも死にたいとテッキリ云うだろうと思うと、オレはイノチが助かりたい、坊主になつて父の後世を弔いたい」と云う。十四の小僧のくせにヒネクれた考え方をする奴さね。考え方というよりも、言い方、表現というべきであろう」と述べ、「戦に負けて親兄弟みんな死んだから、なんのタノシミがあつてこの世に生き永らえて候うべき」ではなく、「オレはイノチが助かりたい」と答えた頼朝のことを、甚だしく素直だと言う。伊豆の蛭ヶ小島で頼朝は、それからの二十年間を念仏三昧に暮した。徳川家康の場合は、一向一揆と戦つたこともあるが、「厭離穢土 欣求浄土」をみずからの馬印に用いて、大坂の陣後の晩年は、日々「南無阿弥陀仏」と書き綴つた。切実に命が助かりたいとは、生の現在のな場面で、「命をはる」ことと紙一重であり、それは生と死の境界線上の願望である。家康は歴史から学ぶことで、そうした頼朝の生存の真実を彼自身の拠りどころにした。

家康は戦国時代に疲弊した諸大名の要求を満たすことで天下人となった。彼の律儀な性格は、今川との同盟を守った父広忠の原理を踏襲している。律儀で小心なのが家康の性格であり、そこには天下人に相応しくないものがあるが、偶然とも言うべき幸運に出会って、時代の先端に立った時に欲が出た。安吾自身が生前は時代の流行作家として活躍したが、家康的なものを、流行作家が一時的に持て囃されることに例える。そして徳川政権の保守性や形式主義には否定的でも、家康に関しては相反両立の矛盾した思念を抱いている。

和辻は『日本倫理思想史』（三）で、家康は秀吉の政治的統一と保守的社会構成を巧みに安定させた英雄であり、秀吉には信長の開拓の精神の継続があるが、家康は秀吉の保守的な面を受け継ぎ、それを地味に、堅実に達成したと言う。それは彼が源頼朝という歴史的存在に学んだからである。信長や秀吉の三十年余りの制覇の間に彼が努めていたことは、天下統一ではなく、徳川家の勢力の揺るがない根柢を固めることであった。それは鎌倉時代以来の古い伝統の武士の主従関係の保持によって行なわれた。伝統破壊の勢いにもかかわらず、三河においては、「御慈悲」「御武辺」「御情け」「御恩」という伝統が生き続けていた。

『武士道の逆襲』で菅野覚明は、「御慈悲」と「御恩」に関して、「通常、主君が主君として家臣に与えるものは、働きに相応した知行や金銀である。（中略）だが、主君はときに、与える理由のない者に対して、あるいは与える必要がないのに、何物かを与える場合がある。この、はみ出した部分の贈与、通常を超えた贈与のことを、『三河物語』は、「慈悲」という言葉であらわしている」と説く。主君から、思いがけない贈与としての「慈悲」を受けた時、家臣には、その「御恩」に報いるには日常を超えた何かによるほかはなく、そこから捨て身の御奉公の覚悟へと駆り立てられた。家康はこうした主従関係を大切に培い、ついにその譜代の家臣達を譜代大名にまで伸ばしたのである。

一方、安吾は家康は確かに保守家であるが、それは時節ならば何事も仕方がないという考えだと言う。秀吉に参じて拝賀するのは些細なことであり、そうした家康の存在に関して次の様に述べる。

このままいつ死んでもそれでよし、そういう肚の非常にハッキした家康で、そういう太々しい処世の骨があったから、野心家のようにあくせくしないが、底の知れないようなところがある。それで古狸などと思はれるが、根は律儀で、ただいつ死んでもいいという度胸の生みだした怪物的な影がにじんでいるだけである。

いつ死んでもいいという最後の度胸はすわっていたが、平常の家康はお人好しで、小さな男であった。彼は五十ぐらいの年配になっても、まだ、たとえば近臣が何かの変事を告げ知らせると、忽ち顔色青ざめて暫く物が言えなくなるたちであったという。秀吉の死後、三成一派が家康を夜襲するという噂の時にも彼は顔色を変へてしまったということ、いい年配になってもそういう素直な人だ。(「家康」22・1全4・348)

家康は、見栄や虚勢の表面的な上手は出来ずに、顔色を変へてしまい、しばしは声も出なくなる小心者であるが、やがて考へ終ると度胸を決める。そうすると梃子でも動かない度胸の男になり、負けると分った信玄との三方が原の一戦にも出陣し、小牧山では秀吉と戦い、あっさりと上洛して拝賀もする。危険に満ちた道を、彼は、ある種の自信を持って踏み渡っていた。安吾はそうした家康の死生観を、「その自信とは、ままよ、死んでもいいや、ということだ。彼は命をはる人であった。そのくせ彼は命をはって天下を望んでいたわけではない。命をはって、ただ現在の生存を完まっとうしていた」と言う。所謂「狸オヤジ」ではあっても、義理堅い所があった。そうした保守的で独創性のなかったことが、かえって戦国時代に疲弊した他の武士達から一目置かれた。

安吾が指摘する家康の「命をはる人」という事に関しては、和辻も同様の事柄を語っている。それは、幼少の頃から今川の人質となっていた家康が、岡崎城に帰ってから三年目の年、岡崎の近くで一向一揆が起こり、家康の家臣の半ばが一揆の味方についた。長い伝統の主従関係も一揆の前に崩壊かと思えたが、戦場に臨んでみると、妙な現象が起こった。それは、「一揆の軍がもう一息で徳川方を圧倒するところまで押しつめて行くと、若い家康は気が気でなく最前線へ飛び出して来る。その姿を見ると一揆に味方した武士たちの鋒先が鈍り、また次の機会にしようという気持ちになって引き揚げてしまう」（『日本倫理思想史』三）という出来事である。上様の家康には刃向えないという気持ちが行き渡り、家康に叛いた家臣も思いの外に深い主従関係の伝統に気づいたのである。

こうした家康の勝利は、徳川の主従関係の伝統に重要な意味を持った。三河武士だけでなく、武田旧臣の中や、さらに江戸に移封してからは関東武士の中から、家康に従うものが続出した。和辻は、こうした秀吉が恐れていた家康の底力に関して、「それらは長期間に徐々に松平郷の主従関係の伝統のつぼの中に融かし込まれたのであって、そこに譜代の臣という色彩は、秀吉の場合よりもはるかに濃厚に醸成せられていた」（『同右』）と説く。

安吾は「狂人遺書」で秀吉の不安を刻銘に描いたが、その予感的中し、秀吉亡き後、もはや家康の勢力に拮抗し得る者はなかった。家康は秀吉の地位の相続者となり、三河の伝統的主従関係を全国的組織に拡張して行った。大名領国制という側面では室町時代末期と変わらないが、そこには鎌倉時代の御家人制度にも劣らない武士社会が出来上がった。和辻の思想史の叙述は、そうした集団的組織的な思想構造を語る。だが、安吾のそれは、より個人的に生活され経験された思想内容に焦点が絞られる。それは家康が命をはり、自らの生存を全うする死生観を語る所に表現の特質がある。

相良亨は、『武士の思想』で、過度期戦国時代の思想に関して、信玄流の生き方と信長や秀吉流の生き方の対比

は興味深いと言う。信長や秀吉流の武士の生き方に対する反省を欠いた「はかのいく生き方」によって、天下統一が実現され、それは「目的実現のためには、武士としてのたしなみにこだわるべきでない」という考え方の勝利である。そして『川角太閤記』を引きながら、秀吉は「目口かわき」という気転や才覚で天下を取ったが、武士の面に執着しない下剋上の英雄には、頼もしい忠臣は容易に求め得なかったと説く。

信長や秀吉が天下を支配していた間に、忍耐強く待っていた家康は、頼もしい忠臣と固く結ばれ、出番を待つ間に祖先から受け継いだ主従の「情誼的結合」を保ち続けた。また、徳川時代の儒教との連関で、信長や秀吉流の生き方から批判された信玄流の『甲陽軍鑑』は、徳川時代の多くの武士に読み継がれた。そうした一戦一戦を大切に<sup>15)</sup>して、その過程そのものを目的とする生き方や、統率者の善悪是非の分別を重視する考え方は、近世儒教と関連する。そして信長や秀吉流の「目的の実現を重視する、はかのいく考え方」は、秩序を取り戻す役割を果たした後、一度は姿を消したが、それは荻生徂徠の思想の内に、改めて姿をあらわし、謙信流の生き方が『葉隠』に受け継がれた。中世から近世への過渡期において、道三や信長などの戦国武士が登場し、その後、秀吉が切り開いた道を完成し、戦国時代に秩序を与えたのは、家康の堅実な主従関係であった。天下を握った家康は、三河の主従関係を全国的に拡大し、徳川幕藩体制を固めた。主従の心情的合一が新しい秩序の基軸をなした。そうした理念なくして、天下の秩序の実現は不可能と見なしたのは、家康の知恵であった。

安吾は、家康のことを、平凡な保守家ではあるが、いざという時に際しては命をはって乗りだしてくる気魄があり、その賭けは現実の誠意にかかっている点で、珍重すべき存在であると言う。そして「古狸よりは、むしろお人好しの然し図太いところもある平凡な偉人」と呼ぶ。言葉が矛盾しているが、人間通の安吾ならではの人間把握の一種である。そこには対象の懷中に飛び込んで、歴史的個性の生存の証しを捉える思想表現の特質がある。



(註)

- (1) 本稿では『坂口安吾全集』(ちくま文庫、一九八九年十二月)を使用した。尚、「イノチガケ」(15・7)のように、作品の発表年(昭和)月を入れた。「二流の人(黒田如水)」(22・1)のように、題名から人物名が分かり難いものは、「武士の名」を入れた。また本文から一文字下げて引用した所には、発表作品および発表年(昭和)月、そして全集の巻号と頁数を(「梟雄」28・6全9・400)のように入れた。
- (2) そうした武士に関するものは、『安吾新日本地理』(26・3〜12)には、「伊達政宗の城へ乗込む―仙台の巻」「消え失せた沙漠―大島の巻(源為朝)」があり、『安吾史譚』(27・1〜7)には、「天草四郎」「直江山城守」「勝夢酔」「小西行長」「源頼朝」がある。
- (3) 和辻哲郎『日本倫理思想史』(三)『岩波文庫、二〇一一年八月』
- (4) 『安吾日本史』編者 川村湊(東洋書院、一九八八年五月)に取り上げられる作品は古代史に関するものが中心で、過度期戦国時代の作品は「小西行長」のみである。
- (5) 『改訂 信長後記』桑田忠親校註、新人物往来社、一九六五年四月)尚、『信長公記』中川太古訳、新人物文庫、二〇一三年十月)なども参考にした。
- (6) 『西ヶ谷恭弘「織田信長事典」(東京堂出版、二〇〇〇年九月)も『信長公記』を主な典拠にしている。「義父道三との会見」の場面などでは、終始に亘って信長の側から意識的に演出された解説になっている。
- (7) 相良亨『日本人の心』(東京大学出版会、一九八四年十一月)
- (8) 奥野健男『坂口安吾』(文藝春秋、一九七二年九月)
- (9) 和辻哲郎『鎖国―日本の悲劇―(下)』(岩波文庫、一九八二年二月)の問題は、安吾の切支丹史との関係で、別個に検討する。この初版は一九五〇年で、『日本倫理思想史』の初版は一九五二年であり、安吾と和辻が同時代的に影響を与え合った可能性はある。
- (10) (兵藤正之助『坂口安吾論』冬樹社、一九七二年十二月)は、『夕刊新大阪』に連載された『信長』を取り上げて、長篇小説では最も成功した秀作であり、全篇が「死のふは一定」に照準があてられ、まとめられていると言う。そして壇一雄と同様に、「この小説の中の、所々の言葉が、信長について語られながら、それが坂口自らを語るものとなっている」と説く。
- (11) 壇一雄『小説 坂口安吾』(東洋出版、一九六九年十月)

(12) 相良亭『武士の思想』（ベリかん社、一九八四年九月）

(13) 『庄司肇』『坂口安吾論集成』沖積舎、一九九二年十月）は、何故に安吾が過度期戦国時代の乱世を多く語ったかに関して、安吾の「魔の退屈」（21・10）の「私は敗戦後の日本がむしろ混乱しうる最大の混乱に落ちて、精神の最大のデカダンスが来た方がいいと思った。中途半端な混乱は中途半端なモラルしか生みだせない」を引いて、「われわれが生きてつづけることが出来るのは、自分の中に新しいモラルを次々と生みつづけることによってである。しかも、人間が生み出す悪行の数々にたじろぐことなく、全肯定的に人間を受け入れた上で、更にそれをつきぬけてゆく強大なモラルを生み出そうというのが、安吾が生涯をかけてい込んだテーマ」であったと説く。

(14) 菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社現代新書、二〇〇四年十月）

(15) 『甲陽軍鑑』や『葉隠』の武士道の検討は別個に検討する。尚、「目的の実現を重視する、はかのいく考え方」の反意語に「はかなさ」という大和言葉がある。（竹内整一『花卉は散る 花は散らない』角川選書、二〇一一年三月）に、「はかない」という言葉は、基本的にはむしろネガティブな意味内容をもっています。しかし同時に、そこにおいてこそ可能であるような、何かしらポジティブなものを見いだすことができます。つまり「はかない」ということを、たんなる気分ではなく、それをそれとしてきちんと自覚することにおいて、これまでの「はか」第一主義のビジネス社会の「忙しさ」のなかで、心亡ぼしてきた。忙し」という漢字はそういう意味でもある何かを取り戻すことができるということと説かれる。

所謂「はかのいく考え方」を目指した信長や秀吉であるが、その人間的本質を考える時、「死のふは一定」や「露と置き露と消えゆく」などの歌が想起されるのは、彼らが一個の武士として命がけで現存した掛け替えのなさが感覚されるからである。